『今物語』に関する基礎的覚書 (2)

竹 村 信 治

本稿は，前稿(1)に続く，今物語所収説話の読み方に関する再検討の第二稿である。第二・三・四段を対象とし，それぞれの話に引かれる古歌が一話の話の展開にどのようにかかわっているかという点から，解釈を試みる。

1 平家物語の平忠度——第二段考(1)

平忠度は，平家物語（日本古典文学大系による。）巻第一の「鱸」条で，「にるを友とかやの風情に，忠盛もすいたりければ，彼女房もゆう〈優〉なりけり」と紹介される平忠盛と仙洞女房との間に生まれた人物。平家物語では，巻第七「忠度都落」の件りで，一度出京の後引き返して俊成に家集を托すや，「さても只今の御わたりこそ，情もすぐれてふかう，哀も殊におもひしられて，感涙おさへがたう候へ」のことばで納受せられ，千載和歌集撰進の折，彼の家集より

さゞなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな

の一首が「よみ人しらず」として入集された話が語られている。又，巻第九の「忠度最後」の件りでは，忠度を討った岡部六野太忠純が，箙に結びつけられた文

行くれて木の下かげをやどとせば花やこよひのあるじならまし　　忠度

にその大将軍が忠度であることを知り，大音声にて名告りをなすや，「敵もみかたも是をきいて，あないとおし，武芸にも歌道にも達者にておはしつる人を，あ(ッ)たら大将軍を，とて，涙をながし袖をぬらさぬはなかりけり」と語り結ばれる。武門にありながら和歌の道に通じ，王朝的情趣を解し体現し得た人物として，その形象に揺れはない。

今物語第二段は，この忠度に関する今一つの逸話。平家物語巻第五「富士川」にも類話が見出される(2)次のような話である。

①薩摩守忠度といふ人ありき。②宮ばらの女房に物申さむとて，③つぼねのうへざまま(に)てためらひけるが，④事のほかに夜ふけにければ，⑤あふぎをはらはらとつかひならしてきゝしらせければ，⑥このつぼねの心しりの女房，**「野もせにすだくむしのねや」**とながめけるをきゝて，あふぎをつかひやみにける。⑦人しづまりていであひたりけるに，⑧此女房「あふぎをばなどやつかひたまはざりつるぞ」といひければ，⑨「いさ，**かしかまし**とかやきこえつれば」といひたりける。⑩やさしかりけり。

⑪**かしかまし野もせにすだく虫のねや**われだに物はいはでこそおもへ

（引用は『今物語・隆房集・東斎随筆』—中世の文学，三弥井書店，昭和54年5月刊—所収本文による。以下同。）

平家物語では，以下，富士川合戦に向かう忠度にこの「宮ばらの女房」が小袖一重と一首を送り，忠度がそれに返歌する逸事が続く。その贈答は次の二首である。

あづま路の草葉をわけん袖よりもたえぬたもとの露ぞこぼるゝ　　（宮ばらの女房）

わかれ路をなにかなげかんこえて行関もむかしの跡とおもへば　　（忠度）

これにより，今物語第二段の類話はこの逸事への導入として用いられたことがわかる(3)が，「わかれ路を」歌について，平家物語は次の批評を付している。

「関も昔の跡」とよめる事は，平将軍貞盛，将門追討のために，東国へ下向せし事をおもひいでてよみたりけるにや，いとやさしうぞきこえし。

時代の変節点に生き，一族の命運を背負って戦

陣に向かう男。女は，「ち里のなごりのかなしさ」だけを思って別離の悲しみを涙で訴える。そんな女に忠度は，自らの系譜に連なる貞盛の先例を引き，無事の帰還を，遠征の成功を，女に対し又自らに対しても，言いきかせようとする。その女への心遣いのあり方，そして，緊迫した情勢にあって尚，和歌によって心情を表明する発想のあり方(4)，「いとやさしうぞきこえし」はこれに対する評言である(5)。「やさし」とは王朝的情趣との接点で発せられる語であるが，それは，王朝的・和歌的情趣につらなる心の用い方，発想のあり方について，中世人が与えた評価であるといってもよいように思われる。平家物語に描かれる平忠度は，この意味において，「やさしき」武将〈つわもの〉なのである。

2　類話の整理——第二段考(2)

今物語第二段は「やさしかりける」（⑩）で結ばれる。一般には，「心しりの女房のとりなし方，それに対する忠度の応じ方」(6) に対して与えられた評言と解され，一話は，「心しりの女房は催促がましい忠度の扇の音をたしなめる際に，むろん『我だに物はいはでこそ思へ』の下句を恋人に代ってほのめかしているわけであるが，忠度はあとで恋人に質問された時，『いさ，かしかましとかやきこえつれば』とわざと下句には白ばくれて返事をした。説話としては『扇をつかひやみにける』で切って，歌を付記するだけでも充分なりたつはずであるが，この忠度のとぼけぶりもまた『やさしかりけり』という評に価いするものであったのだろう。」(7) と説明されている。はたしてそうなのか。前節に述べた「やさし」の意味に即して，以下この話を読み直してみることとする。

本話の類話は多い。その類話間の異同については，次のように整理される(8)。

A　なぜ忠度がためらったか（③）。

イ．叙述なし　今物語・古今著聞集・長門本及び延慶本平家物語

ロ．叙述あり

a．「をとなはむもつつましく」　十訓抄・南都本平家物語

b．来客あり　覚一本平家物語（「いとやんごとなき女房客人」）・源平盛衰記（「高倉院」）等

B　「野もせに」を口ずさむ人が誰か（⑥）。

イ．心しりの女房　今物語・十訓抄・南都本及び延慶本平家物語

ロ．忠度の恋人　著聞集・上記以外の平家物語・盛衰記

C　あとで恋人がどのように忠度に尋ねるか（⑧）。

イ．叙述なし　著聞集

ロ．叙述あり

a．「あふぎをばなどやつかひたまはざりつるぞ」　今物語・十訓抄(9)・南都本及び延慶本平家物語

b．「何して扇をば使ひ止みしぞや」　上記以外の平家物語

c．「さても一日はいかに」　盛衰記

「野もせに」と口ずさんだ女性を忠度の恋人とした（Bロ）盛衰記は，この話題を，

思寄給ける女房も，心え給へる忠度も，互ひに由ありてぞ覚えける。（有朋堂文庫による。）

と結ぶ。これは，古歌（⑪）を媒にして意志伝達を果す忠度とその恋人とのあり方に興趣のあり所を見出した本話柄享受の姿勢を示しており，「野もせに」と口ずさんだ女性を忠度の恋人とする類話一般（後半－⑦以降－部を欠く著聞集も含めて）における説話理解の方向を教えている。

上掲の異同一覧によれば，「野もせに」と口ずさむ女房を忠度の恋人とする類話（Bロ）は，忠度がためらう理由についての叙述をもっている点（AロB），あとで恋人が忠度に尋ねる際「使ひ止みしぞ」と問う点（CロB・c）で，ほぼ共通する。忠度がためらう理由はそのまま恋人が「野もせに」によって「かしかまし」の意を伝えた理由となっており，「使ひ止みしぞ」と問う点は，恋人自身が扇の音を聞いて意図的に「野もせに」と口ずさんだことと符合し，こ

の質問に，忠度に対して意図領解の如何を確認する意味合いを付与することになる。上の共通性は，恐らくは，一話を，古歌についての共通の知識を媒に意志（面会不能）の伝達をはたす忠度とその恋人とのやりとりを語る話として把握し，その理解に基づいて説話叙述に整合性を求めた結果であろうと考えられる。

一方，「野もせに」と口ずさむ女房を「心しりの女房」とする類話（Bイ）は，忠度がためらう理由についての叙述をもたない点（Aイ・ロa⑽），あとで恋人が忠度に尋ねる際「使ひたまはざりつるぞ」と問う点（Cロa）で，共通する。ためらう理由を叙述しない点はともかく，恋人が「使ひたまはざりつるぞ」と問う点は，「野もせに」と口ずさむのが恋人でなく「心しりの女房」であることと符合し，ここに叙述の整合性を指摘することができる。

かくして，本話柄における類話間の異同は，「野もせに」と口ずさむ女房を，忠度の恋人とする説話伝承系統と，「心しりの女房」とする説話伝承系統との二系統間の異同として見なされるべきものと考えられる。前者は，上述のとおり，忠度とその恋人との古歌を媒とする意志伝達のあり様に興趣を見出した説話理解に基づく叙述を備える伝承系統。では「心しりの女房」が「野もせに」と口ずさむ説話伝承はどのような説話理解に基づく叙述を備えたものと解すべきなのか。前者との比較において，従来説明されているように，単に，恋人が「心しりの女房」になり，後半の，忠度とその恋人との問答の意味が，確認から忠度のとぼけぶりへの賞讃となるだけなのか。問題は，「心しりの女房」と忠度とのやりとりの解釈，そのやりとりと後半の恋人とのやりとりとの関連についての解釈にかかわる。「やさし」の本義に立ち返り，次節にこれらの問題に関する考察を進めよう。

尚，上述の本話柄における二伝承系統の先後について，「野もせに」と口ずさんだ当人がわざわざ忠度になぜ扇を使いやめたかを尋ねる前者の説話展開は不自然であり，後者に対する改変を加えたものであろうとの指摘⑾がある。これに従えば，前者の系統は，その類話が平家物語諸本に集中するところから，忠度，或いは彼とその恋人との人物像を紹介する為の集約的説話展開の必要性によってもたらされたものとも考えられる。

3　薩摩守忠度の「やさし」—第二段考(3)

さて，「野もせに」を口ずさむ女房を「心しりの女房」とする伝承系統の説話はどのような説話理解に基づく叙述を備えたものと考えるべきか。上述の解釈上の問題—「心しりの女房」と忠度とのやりとりの解釈，そのやりとりと後半の恋人とのやりとりとの関連についての解釈—に注意しつつ，一話の叙述を辿ると，「心しりの女房」が「野もせに」と口ずさむ系統の説話は，私見によれば以下の如く読みとられる。

ある夜「宮ばらの女房」のもとに忍んで行った薩摩守忠度は，しばらく局の入口あたりにかくれて恋人に来訪を伝えようと様子をうかがい，人影が少なくなるのをまっていたが，一向にそのチャンスがない。時間ばかりがたち，このままでは，たとえ逢ったとしても間もなく夜が明けてしまう。できることなら他の女房がいなくなってからいつもの扇の合図を使いたいのだが，やむをえない。忠度は扇をはらはらとならす。折から，自らの恋の行方を見定めかねてもの思いにふけっていた「心しりの女房」は，同僚の女房（「宮ばらの女房」）の恋人・忠度の来訪を扇の音に知り，「野もせにすだくむしの音や」とたしなめる。〈忠度さん，あなたは自分の恋人との逢瀬をまちかねて，まるで野も狭にすだく虫の音のように扇をおならしになる。でも，私だって，私の恋人の訪れを心待ちにして，こうして思い悩んでいるのですよ。〉忠度は女房のことばにその苦衷を思いやり，退いて，待つ思いを女房と共にする。後，局の人々が寝しずまった頃，ようやく忠度は恋人と逢う。「心しりの女房」との経緯を知らぬ恋人は，待ちかねた様子の忠度を不審におもい，尋ねる。誰しも，ままならぬ恋に苦しむ姿は同僚に知られたくないもの。忠度は「心しりの女房」への配慮から，「われだに物はいはでこそおもへ」の下句を連想できない日常語「かしかまし」（初句）を引

き，恋人の手をとりながら，問いをかわしたのである。

「心しりの女房」は忠度の恋人の心中（「われだに物はいはでこそおもへ」）を代弁した[12]のではない。自らの心境を古歌に托したのだ。忠度はその古歌の一節に「心しりの女房」の心中を察し，それに応ずる配慮をめぐらす。そこに誤解など生じていない[13]。後半の恋人の尋問に対する忠度のとぼけぶりも，この「心しりの女房」への心遣いと一連のものと解釈すべきで，決して忠度の一人相撲ではない。本話の評言⑩「やさし」は，「心しりの女房」の古歌引用を契機とするこの一連の忠度の心遣いに対して与えられたものと見るべく，そう解してこそまた，「やさし」の本義に叶う。

かくして，「野もせに」句を口ずさむ女房を「心しりの女房」とする伝承系統の説話は，その叙述に従うかぎり，古歌引用を契機とする忠度の心の用い方に王朝的情趣を嗅ぎとる説話理解に基づいたものと考えられる。これは，「野もせに」と口ずさむ女房を忠度の恋人とする伝承系統の説話が意志伝達の具に古歌を用いている所に興趣を感じて説話形成をはかる説話理解のあり方を示している点との対比において，両者の王朝文芸世界に対する享受の姿勢の異質性，その深浅の差違を窺わせることになる。さらに又，両系統の説話内容の相違にかかわらず同じく「やさし」の評言が与えられる類話の実際に着目すれば，「やさし」の語義の変化とその背景にある中世人の王朝文化志向の中味の形式化・形骸化を示唆することにもなろう。

この系統の説話が今一つの「野もせに」と口ずさむ女房を忠度の恋人とする系統の説話に先向するとの指摘に従えば，忠度の恋人系統の説話は，意志伝達に古歌を用いる点の興趣に注意を奪われ，それを契機とする忠度の心遣いのあり方に理解が届かなかったことになる。後半の恋人の問いに対する忠度の返事から出発する一話への解釈行為は，「野もせにすだく虫のねや」を「かしかまし」或いは「来客中につきお静かに」と等価な意味を担う意志伝達の具として理解させる。そこでは引用句に托された真意〈我だに物はいはでこそおもへ〉は掬われず，「心しりの女房」と忠度とのやりとりの意味など問われるべくもない。古歌を意志伝達の具として用いる点への興趣の増大に伴なって「心しりの女房」はその登場の意味を失い，忠度の恋人がこれにとって代わる。その結果として，恋人が直接面会不能を伝える説話展開がもたらされ，面会不能の理由を説明する叙述が増幅される（Aロｂ）。童蒙への説示という有効性はなお存するものの，自分で「かしかまし」との意を伝えながら後に扇の使用中止の理由を尋ねて確認の意図を担う後半（Ｃロｂ・ｃ）は，しかしながら改変後の原型残存の姿にほかならず，省略された話型を生むことにもなったのである（Ｃイ）。説話叙述の相違は説話理解の相違に基づく。更に，本話柄の場合，説話理解の相違は王朝文芸世界に対する享受の姿勢の異質性に起因する。「野もせに」と口ずさむ女房を忠度の恋人とする系統の説話は，それを「心しりの女房」とする系統の説話が表現し得た典型的な王朝的情趣，「やさし」の世界を享受できず，皮相的説話理解にとどまったのである。形骸化した貧しい王朝志向の産物というほかない。

ところで，ままならぬ恋に身と心を苦しめている女性のつぶやきというものは，それを耳にするものを，沈黙と退去に導くものらしい。堤中納言物語「このついで」で，中納言の君は，清水参籠の折，隣の局のけはいゆかしき女性が，風に散りしく紅葉をみて

いとふ身はつれなきものを憂き事をあらしに
散れる木の葉なりけり
風の前なる

（日本古典文学全集による。）

とかすかにつぶやくのを聞いて，「まことにいとあはれにおぼえ侍りながら，さすがにふといらへにくゝ，つゝましくてこそ侍りしか」といった状態であったと，自らの体験談を語る。聞いていた女房からは「口惜しき御ものづゝみ」と非難されることになるが，この中納言の君の抒情は，本話の平忠度の抒情に近い。

4　雪もよい朧月——第三段考

おとこきてせちに物いはむとてあるほどに，しぐれのすれば

わたつうみのそこにふかくはいれずともしぐれにだにもぬらさざらなむ

せめてわびければ，すのこによびいれてものいふ

ふりとけぬしぐればかりにやまびこのこゑをかたみにきゝかはすかな

これは，作り物語の成立に関して考察される場合に，必ずといってよいほど引き合いに出される，伊勢集収載の屏風歌〈「この中宮，東宮の女御ときこえさせける時，だいたまはせてよませたまひける御屏風の歌」〉である（私家集大成1所収，西本願寺蔵「三十六人集」本による。47・48番）。ここはその冬帖の二首。よばう男は，いつも邸内に招き入れられることを求める。雨がふれば雨を，時雨がふれば時雨を，そして雪がふれば雪を理由に，それを訴える。

今物語第三段は次のような話である。

ある殿上人がしかるべき貴所の姫君のもとを訪れ，庭にたたずみ中の様子をうかがっていたところ，折しも雪が降ってきた。夜である。風に運ばれてふる雪なのだろう，空には雪にけむる月がぼんやり見えている。雪を避けて中門の板敷にひかえた男は，邸の女房に姫君への取次ぎを求める。しかし女房は，主人の意向を受けて，これに応じようとしない。「このおぼろ月は，いかゞしくべき（群書類従本「いかゞし候べき」(10)）」〈春の夜ならば源氏物語花宴の朧月夜尚侍のように，月の風趣を賞でて戸外の一人歩きを楽しむこともできましょう。しかし今宵は雪もよいの朧月，外は寒いばかりです。どうしたらよいのでしょう，今少し内ざまに入れていただけないか。〉　男は訴える。こんな男の訴えに「あはれ」を催し，一いち内へ招じ入れるような女房では，彼女の主人は色好む男たちの慰みものにされてしまう。かような申し出を風流にあしらい，その機智のすばらしさによって，逆に主人たる姫君を男に一層ゆかしく思わせ世評を高めるのが女房たるものの役割り。この女房，男の申し出にはまともに向かわず，

照もせずくもりもはてぬ春のよのおぼろ月夜に**しく物ぞなき**

（今物語本段末尾の注記による。）

をふまえたことばとして男の「このおぼろ月は，」を聞きなし，「とりあへず，うちより**たゝみ**を**おしいだし**たりける」とかわす。〈あら，「しくものぞなき」－引用歌結句－とおっしゃるのでしょう。板敷に直にお座りになっては寒いでしょうから，これでもおあてになっては。雪の朧月夜も春霞のとは又ちがって趣きがありますこと。〉　男は体よくこの場に釘付けされてしまったのである。

一話に対する評言は，「心はやさ，いみじかりけり」。女房たるものの役目をわきまえた，この機転のきいた男のかわし方に対して与えられた評価である。本段話の語りは，古歌を媒としてその背後で展開する「ある殿上人」と「寝殿の女房」との機智の攻防に，又，女房の心用意・とりなし方に，王朝古典世界にかよう情趣を見出し，形成されたものであろう。

ところで，王朝物語世界で，人々が着座の用として下に敷くものに，「たたみ」と「わらふだ（藁蓋・円座）」とがある。源氏物語には以下の如き用例が見出される。

「たたみ」

◎こたみは，妻戸を叩きて入る。皆，人々，しづまり寝にけり。（小君）「この障子口に，まろは寝たらん。風吹き通せ」とて，畳ひろげて臥す。御達，東の廂に，いとあまた寝たるべし。戸放ちつる童も，そなたに入りて臥しぬれば，（小君）とばかり空寝して，火明き方に屏風をひろげて，影ほのかなるに，（源を）やをら入れたてまつる。　〔空蟬〕

◎殿におはしたれば，我御方の人々も，まどろまざりける気色にて，ところどころに群れ居て，「あさまし」とのみ，世を思へる気色なり。さぶらひには，親しう仕うまつるかぎりは，御供にまゐるべき心まうけして，おのおの，私のわかれ惜しむほどにや，人めもなし。さらぬ人は，とぶらひに参るも，重きとがめあり，わづらはしき事まされば，（以前は）ところ狭く集ひし馬・車の，（今は）かたもなく，

さびしきに，（源は）「世は憂き物なり」と思し知らる。台盤なども，傍は塵ばみて，畳，ところどころ，ひきかへしたり。「みるほどだに，かゝり，まして，（退京後は）いかに荒れゆかむ」とおぼす。〔須磨〕

「わらふだ」

◎おとゞ（源氏），（夕霧・柏木を）御らんじおこせて，「上達部の座，いとかろがろしや。こなたにこそ」とて，対の南おもてに，いり給へれば，みな，そなたに参り給ひぬ。宮（蛍兵部卿）も，居なほり給ひて，（夕霧と）御物語し給ふ。つぎつぎの殿上人は，簀の子に円座めして，わざとなく，椿もちひ・梨・柑子やうの物ども，さまざまに，箱の蓋どもに取りまぜつゝあるを，若き人々，そぼれ取りくふ。さるべき干物ばかりして，御かはらけ参る。衛門督（柏木）は，いといたく思ひしめりて，やゝもすれば，花の木に目を付てながめやる。〔若葉上〕

◎（致仕大臣）この宮（一条宮）に，蔵人の少将の君（柏木の弟）を御使にて，たてまつり給ふ。

契あれや君を心にとゞめおきてあはれと思ふうらめしと聞く

なほ，えおぼし放たじ

とある御文を，少将，もておはして，たゞ，（邸内に）いりに入給ふ。南おもての簀の子に，円座さし出でゝ，人々，もの聞えにくし。宮（落葉宮）は，まして，「わびし」と思す。〔夕霧〕

◎（小君）「山より，僧都の御消息にて，参りたる人なんある」と，いひ入れたり。あやしけれど，（妹尼）「これこそは，さは，たしかなる，御消息ならめ」とて，「こなたに」と，いはせたれば，いと，清げに，しなやかなる童の，えならず装束きたるぞ，歩み来たる。円座，さしいでたれば，簾垂のもとに，ついゐて，「かやうにては，さぶらふまじくこそは，僧都は，のたまひしか」と言へば，尼君ぞ，いらへなどし給ふ。〔夢浮橋〕

（日本古典文学大系による。以下同。）

用例が少なく，断定はしかねるが，御簾の「うちより」「おしいだ」す敷物は，「わらふだ」であって「たゝみ」ではないようだ。「わらふだ」ではなく「たゝみ」をあえて御簾の内より押し出した本話の「寝殿なる女房」，或いは，「只見」をかけて，邸内侵入を拒否し雪の朧月鑑賞を促したのかも知れない。

5　女房たちの和漢朗詠——第四段考(1)

前稿及び本稿前節までに扱った今物語冒頭の三段は，古典世界についての深い理解を背景に，その場の状況に応じた心遣い・ふるまいをみせる「やさし」き人々をとりあげた話であった。これらに続く第四段も，又「やさし」の評言が二度にわたって示される話である。登場人物たちのどのようなあり方を評して「やさし」というのか，まずはその話の概要を紹介しておこう。

ある殿上人が夜ふけて古宮の邸を訪れる。勿論，そこに住む姫君或いは女房がめあてであろう，北の対の馬道あたりで邸内の人影がなくなるのを待っていた。と，数人の女房が連れ立って局に退出してくる気配がする。男は身をひそめてその様子をうかがっていたが，やがて，一行の先頭を進んでいた女房（「さきにたちたる女房」）が御局（十訓抄「つぼ」）の遣水に蛍が集っているのに目を留め，①「**蛍火みだれ飛で**」と何げなく吟詠した。男の目の前での出来事である。これに応ずるように，別の女房（つぎなる人」）も，面を男の方に向け，②「**夕殿にほたるとんで**」とくちずさむ。この女房とかなり親しい女房なのだろう，一番後ろに控えていた女房（「しりにたちたる人」）は，驚いたような顔をして，③「**かくれぬ物は夏むしの**」とからかった。思いもよらず女房たちの興趣あるやりとりを耳にしたこの男，「とりどりにやさしくもおもしろくて」「何となくふしなからんもほいなくて，**ねずなき**をしいでたる」。「ねずなき」とは舌を鳴らしてねずみの鳴声に似た音を出すこと，男女の逢引きの合図にしたという。蛍の光に惹かれての風趣ある詩歌句のかけ合いに，突然，闇の中からチュチュの音——。しかし，女房たちは驚かない。「さきなる女房」が，④「物おそろしや，**ほたるにも声のありける**よ」

と受けておいて，この「ねずなき」に応ずる一句を待っている。一瞬の空白の時間。だが男には，それが後悔の思いを呼びさまして切なく，いたたまれない気持ちになる。と，その時，一人の女房（「いまひとり」）が，⑤「**なく虫よりも**とこそ」ととりなした。一話如件。評言は，「これもおもひ入たる程おくゆかしくて，すべてとりどりに，やさしかりける。」とある。

さて，漢詩や和歌の一句が本話のような場面で口ずさまれる時，そのことばの発し手は，ただその場の話題からの連想による語戯的呼応だけを意図しているのではなく，吟詠し残した詩歌句に自らの感慨や胸奥の思いを托すところに真意がある。発し手の送り出す信号にその真意を察する聞き手，そこに，王朝的・和歌的情趣につらなる心遣いやふるまいがもたらされて，「やさし」の世界は幕を開き始めるのである。本話の場合，引用詩歌句に登場人物たちの真意を探れば，それは次のような思いであったと考えられる。

①「蛍火みだれ飛で」（「蛍火乱飛秋已近。辰星早没夜初長。」(15)）
　→「秋已近。辰星早没夜初長。」
②「夕殿にほたるとんで」（「夕殿蛍飛思悄然」(16)）
　→「思悄然」
③「かくれぬ物は夏むしの」　（「つゝめども かくれぬ物は夏虫の身よりあまれるおもひ成けり」(17)）
　→「つゝめども」「身よりあまれるおもひ成けり」
④「ほたるにも声のありけるよ」
　→後述
⑤「なく虫よりも，とこそ」（「おともせでみさほにもゆる蛍こそ鳴虫よりもあはれ成けれ」(18)）
　→「おともせでみさほにもゆる蛍こそ」「あはれ成けれ」
　（弓形括弧内の詩句・和歌は，今物語本段末尾の注記による。）

これによれば，①～③の引用詩歌句によってかわされる女房達のやりとりは，以下の如き展開をもつものと推察されよう。

①「まあ，蛍よ。秋が近いのね。そういえば，このところ少し夜が長くなったかしら。」
②「そうね。夜が長くなるのね。（頼みならないあの人の訪れをまつ夕暮れの時の長さ，それを思うと）もの悲しい気持ちになるわ。」
③「あら，そうだったの。かくしてもだめよ。顔にかいてあるわ。いったいどなたのことをそんなに思ってらっしゃるの。」

ところで，この三詩歌句，ともに和漢朗詠集に収載されたものである。①は夏部「蛍」。②は，恋部で，源氏物語にも用いられている（桐壺・幻）。朗詠集所引の形は「夕殿蛍飛思悄然。秋燈挑尽未能眠。」（日本古典文学大系による。782番。）で，文芸作品に引かれる場合，長恨歌での原義に即し，亡き人を懐想し「思悄然」として「不能眠」場面に用いられる。ただ，この場面，②を故人懐旧の情を托したものと解すれば，恋わずらいを揶揄した③「かくれぬものは夏虫の」は②への誤解に基づく連想となる。恐らくは，この句に対して，故人懐旧ではなく〝秋の夜の恋情〟を托する理解の仕方があったのだ。ここはその理解に基づいて，①の「秋已近。辰星早没夜初長」に応じた吟詠だろう。朗詠集では，この句，「懐旧」「無常」ではなく「恋」の部に収載される。又，拾玉集（巻四）・拾遺愚草・（員外雑上）収録の「文集句題百首」でも，この句は「懐旧」「無常」ではなく「恋五首」の句題の一つとして掲げられて，次のように詠まれている。

君故にうちも寝ぬ夜の床の上に思を見する夏虫の影（拾玉集1947．私家集大成３による。）
くると明と胸のあたりも燃つきぬ夕の蛍夜はの燈火（拾遺愚草3443．私家集大成4による。）

これらは上述の見方をたすけてはいないだろうか。③は夏部だが，恋の歌でもある。ここは，自らのかくせぬ程の強く深い思いを表明する原義を，場面に即して，「つぎなる人」のかくれぬ思いを見出したとの意に読みかえて用いたものであろう。

かくして，①～③に引用された詩歌句において，女房たちは，吟詠に托された真意を互いに読みとり，心の会話をつむいでゆく。一見，蛍

を話題にして，それを素材とする朗詠詩歌句を連ねただけのようでありながら，そこには，単なる知識の披露ではない，状況に即した意味展開が成立しているのだ。ここに，詩歌に対する身についた理解のあり方，通暁ぶりを窺うこともできよう。男の「とりどりにやさしくもおもしろくて」という感想は，女房たちのかような詩歌についての習熟ぶり，心意の表明・理解の仕方に対して与えられたものである。

6　「ねずなき」した男の真意―第四段考(2)

さて，男は，この感慨に促され，「何となく，ふしなからむもほいなくて，ねずなきを」して女房たちのやりとりに加わろうとする。女房たちが①～③でかわした心の会話を読み解くことのできた殿上人，彼が「ふしなからむも」不本意に思われてというのだから，「ねずなき」は男が意識的に企図した趣向である。「ねずなき」の趣向の真意とは何か。

この問いについて，本話の類話を収載する源氏物語提要（巻第三・蛍巻）は，一つの示唆を与えている(19)。類話は，蛍兵部卿と玉鬘との間にかわされた次の贈答歌に対する参考話として引かれる。

・鳴く声も聞えぬ虫のおもひだに人の消つには消ゆるものかは　（蛍兵部卿）
・声はせで身をのみこがす蛍こそいふよりまさる思ひなるらめ　（玉鬘）

その内容は以下の如きものである。

むかし大内に五人の女房とて，かくれなき有，ひとりは和泉式部，一人は紫式部，ひとりは赤染右衛門，又は右馬内侍，今ひとりは伊勢大輔也。此五人つれたちて大内へ参るとて廊下をとをりけるを，或殿上人かたかけにて見らるゝに，折ふし五月のすゑつかたなれは，蛍の飛乱れけるに，さきなる女房，㋑**蛍火乱飛秋已近**といふ。次なる女房，㋺**夕殿蛍飛思悄然**とくちすさむ。又次のは，㋩**鳴声の聞えぬ虫の思ひたに々々**と，またひとりの女房，㋥**声はせて身をのみこかす蛍こそ々々**と，あとの女房，ちとさかりて物をもいはて通る所に，さきの殿上人，ねすなきをしけれは，㋭**あらおそろしや蛍にも声の有歟**といふて，足はやに通りけり。寔にやさしき事と也。

（稲賀敬二『今川範政源氏物語提要』―源氏物語古注集成２，桜楓社，昭和53年11月刊―による。）

一読して，説話の設定・叙述展開における今物語話との相違は明らかだろう。本話柄の類話は，この外，十訓抄・悦目抄に見られるが，その設定・叙述展開は今物語話に類似する。又，提要話に引かれる詩歌句の内，㋩・㋥は上掲の源氏物語歌二首の上句であるが，これは本話柄の類話間にあって提要話にだけ見られるもの。提要が本話柄を収載するのはこの独自異文の故であろうが，これによっても，提要話の類話間における異質性ははっきりしている。その異質性が今物語話系の説話に対する改変の結果であることは，次節に考察する類話間比較によって明確であるが，ここでは，その改変を得た提要話に㋩㋥の源氏物語蛍巻からの歌句引用が見られる点に注目したい。この二歌句は，どのようにして本話柄にもたらされたのか。

勿論，この二歌句は「兵部卿の宮しのひて渡り給ひ，玉鬘の蚊帳のうちへ入給ふを，源氏かねてしたくやし給ひけん，蛍をあつめ薄物につゝみ置けるを蚊帳の内へ入給ふときに，蛍の光りにてよそへ見ゆるを憚りて蛍を払すつるとて」（提要による。）といった状況で詠まれた歌に基づいており，歌自体も蛍を素材として用いたものであるから，改変の際に新らたに採用されたと解せぬわけでもない。しかし，これを，本話柄についての改変以前の理解のあり方を反映したものとして見れば，別の経緯を想定することも可能である。即ち，本話柄の男の「ねずなき」に，或いはそれを受けた④「ほたるにも声のありけるよ」のことばに源氏物語蛍巻の上掲蛍兵部卿歌を，又，「いまひとり」の女房の⑤「なく虫よりもとこそ」にこれを本歌とする玉鬘の返歌を重ね読む理解の仕方があったと見るのである。ところが，男の「ねずなき」の趣向を認知せず，それを女房たちの風情ある吟詠の応酬に水をさす「物おそろし」（④）きふるまいと読みとるところから説話展開に改変が加えられ

る間に，旧来の説話理解に供された源氏物語歌だけが（注記として）残される。それが，今物語話系説話が用意する①～③の意味的展開を解せぬ改変者の手によって，その形骸化した王朝志向故に，源氏物語歌である点が評価され，㋑～㋺といった，一条朝の女房たちの口ずさんだ，何の脈落もない羅列的詩歌吟詠の中の二歌句として，利用された。こんな経緯を想像させるのである。

今物語話の後半，男の「ねずなき」以降のやりとりに源氏物語蛍巻の上掲の贈答歌を重ね読む理解の仕方があったとして，しかしそれは，逆に言えば，登場人物たちの意図を説話叙述の展開に即して正当に把握したことを意味しよう。男の「ねずなき」の趣向の真意は，女房たちに蛍兵部卿の「鳴く声も」歌を想起させるところにあったのだ。

蛍兵部卿歌は，「鳴く声も聞えぬ虫」として蛍をいい，声ある人間としての自らの燃ゆる思いを強調したもので，勿論④「ほたるにも声のありける」ことを詠じてはいない。しかし，蛍を声との関連で把握した発想には，詩歌句連想の起点が蛍にあるこの場に「ねずなき」即ち声を投げ入れる趣向と一脈通ずるものがありはしないか。男は，その発想の類同性をたのみ，この場で「ねずなき」することによって，女房たちが蛍兵部卿歌を想起する契機をもたらそうとしたのである。「さきなる女房」の④「ほたるにも声のありけるよ」は，男の真意を察知し，他の女房に，この「ねずなき」の意図のありどころを明確に認知せしめる為のことば。男は，「包めども」（③）歌の恋の苦衷を吐露する原義に添う形で蛍兵部卿歌を想起させ，以て「夕殿に」（②）の女房（「思悄然」）に「人の消つには消ゆるものかは」と絶えぬ思いを伝えてその心中を慰撫し，情趣ある女房達の心の会話につらなろうとしたのであろう。

或いはこの殿上人，実は「夕殿に」（②）の女房の恋人であったかも知れない。女のあまりに思いつめた様子に，来訪と自らの絶えぬ思いとを伝えようと「ねずなき」をしたのである。衆目をはばからぬこの直接的な意志表明に，その場に居合わせた女房達は，内心驚き，当惑する。年配らしい女房（「さきなる女房」）があしらい取りなそうとするが，あまりに急速な恋の情趣の局所的な深まりに，他の女房たちはその場ながらにとり残される。一瞬の空白の時間。この緊迫感をほどよくときほぐしたのが「いまひとり」の女房。「さきなる女房」のサジェスションを承けて源氏物語蛍巻の玉鬘の返歌を想起し，その本歌の一句を投げ入れる。男の企図した趣向を領解したことの伝達とその男の行為への何げない揶揄とに出るこの機智を得て，女房達はようやく局への歩みを歩み始めることができたのである。「夕殿に」の女房がそこに一人とどまったのかどうか，それはこの殿上人との関係如何にかかわる重要案件だが，今はそれを知る由もない。

いずれにしても，本話登場の人々は，王朝的文芸世界の情趣に身をゆだねて真意を托し，古詩古歌への共通の理解を媒に互いの心中を察し慮ってその場に応じた心遣いを重ね合う。そのあり方は，「とりどりにやさしかりける」の評言に叶うというべきだろう。それぞれ一話の展開に異伝を含むものの，悦目抄〈話末注記〉・源氏物語提要〈説話冒頭の人物設定叙述〉が，本話登場の女房を，和泉式部・紫式部・赤染衛門・右馬内侍・伊勢大輔　（悦目抄は，「此五人の女房は」としながら，清少納言を加えて六名をあげる。）としたのも，安易な付会ながら，少なからず首肯されるところであろう。

7　今物語所載話の位置——第四段考(3)

さて，今物語第四段は十訓抄・悦目抄・源氏物語提要（蛍巻）に類話をもつ。類話相互の異同は，一話の興趣を何処に見出して叙述を形成したかによって，もたらされたものである。以下，異同を整理するところから類話各話の本話柄に対する読み方を吟味し，そこに今物語話の特性をうかがおうと思う。

本話柄における類話間の異同は，説話の設定・叙述展開について指摘できる。各話に見る説話設定の叙述は次の通りである。

〔今物語〕ある殿上人，ふるき宮ばらへ，夜ふ

くるほどにまゐりて，北のたいのめんだうにたゝずみけるに，つぼねにおるゝ人の気色あまたしければ，

〔十訓抄〕或殿上人，五月の二十日余りのころ〈頭注云,「五月，佐本狩本に六月，塙本に十月とあり」，岩波文庫本「みな月」〉，いとくらきに太后の宮にまゐりて，めだうにたゝずみけるに，うへより，人の音のあまたして来りければ〈岩波文庫本「あまたしければ」〉，

（石橋尚宝『十訓抄詳解』による。）

〔悦目抄〕ある殿上人。みな月の廿日あまりの比〈日本歌学大系本文「さ月」とあり傍書に「みなイ」〉。いとくらかりけるに。やむ事なき后の宮にまいりて。めんだうにたゝずみけるに。うへより。人のをとのあまたしければ。

（群書類従本による。）

〔源氏物語提要〕　上掲。

今物語話・十訓抄話・悦目抄話が，「ある殿上人」より始まる叙述構文において近似し,「むかし大内に五人の女房とて」を以て始まる前節所引の提要話のそれに対立する点，一見して明らかであろう。ただ，その設定の中味を比較すると，今少し詳細な類話間の関係を辿ることができる。

今物語話は，十訓抄話・悦目抄話と近似する説話設定の叙述をもつが，時間設定がなく，場所を「大后の宮」「やんごとなき后の宮」でなく「ふるき宮ばら」とする点，相違している。

提要話は，今物語話とは共通する設定がないが，十訓抄話・悦目抄話とは，時間設定・場所の設定（「大内」）で類同する。特に悦目抄話とは，本話柄の女房たちに一条朝の女房を比定するあり方において，近似する。悦目抄話は，話末注記に，次のような記事をもっている。

此五人の女房は，天暦の御時梨壺の五人の歌仙の中に，清原元輔女，清少納言と云ふ者也。一人は其比源氏物がたり作れる紫式部，並びに赤染衛門，伊勢大輔，和泉式部，馬内侍など聞ゆる人々也。いと取りどりに心有りて優なる人ども也。あたらしくよみ出たらむはさる事なれども，心ある様やさしくこそ侍れ。(乙)〈棒線部，類従本になし〉。同一条院御時―中略。枕草子二九九段〈日本古典文学大系章段。「香炉峰雪撥簾看」を媒とする中宮定子と清女とのやりとりを語る段。〉の話を引く。―いとやさしかりける事也。是は一条院の御時の事也〈類従本になし〉。此人々はかやうの事のみにもあらず，ふるまひいみじき事ども おほかりける。(丙)

（日本歌学大系本文による。）

悦目抄話の説話設定の叙述は，十訓抄話のそれに酷似する。設定に関する叙述だけでなく説話叙述のすべてが近いのだが，上掲の話末注記部分を，十訓抄はもたない。今物語話との関連は，十訓抄話と重なる部分で，十訓抄話と同じ近さを示すにとどまる。

このようにして場面設定の類同点と相違点を整理するとして，この類同点と相違点とから四類話の関係図式を作成すると，

今物語話－十訓抄話＝悦目抄話－提要話

となる。

次に，類話間における説話展開の異同について，登場人物の言動の順序により整理すると，次のようになる。

言動の内容*	今物語	十訓抄	悦目抄	提要
I「ゆゆしき蛍かな。(「雪を・―」悦目抄）集めたらんやうにこそ見ゆれ。」		1	1	
II「蛍火乱飛」(「―・秋已近」提要)	1	2	2	1
III「夕殿蛍飛」(「―・思悄然」提要)	2	3	3**	2
IV「かくれぬ物は夏虫の」(提要「鳴声の聞えぬ虫の思ひだに」)	3	4	4**	3
V男の「ねずなき」	4	5	5	5
VI「物おそろしや。蛍にも声のありけるよ。」	5	6	6	6
VII「なく虫よりもとこそ（―・思ひしに」十訓抄・悦目抄)」(提要「声はせで身をのみこがす蛍こそ」)	6	7	7	4
VIII女房が「足はやに通りにけり」				7

*「言動の内容」は，各項代表的な形でボし，主たる異同だけを補った。
**日本歌学大系本の悦目抄では，IIIはなく，IVは「夏虫の」とある。

IIIIIIの漢詩句の掲げ方，IVVIIの引用歌句の相違，Vの「ねずなき」の順序に，提要話の異質性は明らかである。VIIIで提要だけが一話を「(女房）足はやに通りにけり」として結ぶのは，Vの「ねずなき」の順序が他に異なっている点と深くかかわっている。前節に述べたように，男の「ねずなき」は「何となくふしなからむもほいなくて」(今物語話。十訓抄・悦目抄「何といふ一ふしもなからんがほいなくて」)企画した趣向であった。ところが，提要話はその企画性に関する叙述をもたず，突然の「ねずなき」がVIで受けられVIIIの行為をもたらしたことを語るにとどまる。提要話においては，「ねずなき」の趣向は認知されず，むしろ，蛍を素材とする詩歌句をつらねて情趣ある雰囲気を醸成した女房たちに対立する，心なき行為として扱われているのである。VIIが「ねずなき」をうけるものでなく，IVに続く歌句として位置するのも，詩歌句引用を一括して女房たちの風趣ある吟詠の応酬ぶりを強調し，以て「ねずなき」に鋭く対立せしめる意図に出たものであろう。

ところで，提要話の説話展開の異質性にみる，かような女房たちの吟詠を重く扱うあり方は，本話柄に対するどのような説話理解に基づくものなのだろう。この問いに関して示唆的なのは，上に引用した悦目抄話末注記における話末評語のあり様である(引用の波線部，参看)。

悦目抄話は，一話を，今物語話・十訓抄話と同様に，

すべて，此人々，とりどりに，いとやさしくぞありける。（甲）

で語りおえる。ところが，この評言は，話末注記部分で，人物比定の記述のあとに，

いと取りどりに心有りて優なる人ども也。あたらしくよみ出たらむはさる事なれども，心ある様やさしくこそ侍れ。（乙）

として繰り返され，更に，枕草子話を紹介した後でも

此人々はかやうの事のみにもあらず，ふるまひいみじき事どもおほかりける。（丙）

と記される。これによれば，本話柄に対して今物語話・十訓抄話と同様の形で与えられた評言（甲）に見える「此人々」とは，悦目抄話において，一条朝に実在した女房たちのこととして把握されていたことになる。「此人々」に，殿上人は含まれていないのだ。即ち，悦目抄話は，説話叙述において十訓抄と酷似するあり方を保ちながら，一話を，一条朝の女房たちの風趣ある吟詠の応酬ぶりを語る話として理解していたと考えられるのである。提要話の説話展開のあり方は，この，悦目抄話に見るような説話理解と深くかかわって成立したものであろう。

ここで，提要話の説話設定が，一条朝の五人の女房が「大内」に上るおりの廊下での出来事として叙述されていた点は，想起されてよい。提要話とは，悦目抄話に窺うことのできるような説話理解に基づき，設定・展開を中心とする叙述の全般にわたって，大幅な改変を施したものだったのである。

さて，悦目抄話に見るような説話理解は，本話柄から読みとられる興趣のあり方に一条朝の女房たちが演出した興趣ある世界を重ね，この女房は一条朝の誰某みたい，といった主観的な比定の試みを繰り返すなかでもたらされたものであろう。十訓抄話の「太后の宮にまいりて」といった設定もこの説話理解を助長するに力あった(20)ものと見られるが，しかしこの説話理解そのものは，「ねずなき」に托した男の真意についての無理解を招いており，決して一話への深い解釈行為の結果とはいえない。提要話の引用詩歌句のあり方を見ても，5・6節に指摘した意味展開を認めることはできず，蛍を素材とする古詩・古歌の羅列，或いは知識の披露にすぎるものとはいいがたい。ここにも又，3節に述べた，形骸化した王朝志向による皮相的説話把握・表面的古典享受の姿勢が顕現しているというべきだろう。

これに対して今物語話・十訓抄話は，叙述のあり方に等価な説話把握をそれぞれに認め得るとすれば，その説話理解は悦目抄話・提要話のそれと無縁である。ただ，今物語話と十訓抄話とは，全く等しい説話叙述をもつわけではない。説話の設定についての相違は既に述べたところ。展開に関しても又，Iのことばの有無に相違を

見出すのである。ここでは，この説話展開の相違に注目し，その種差の検討から今物語話の性格を指摘することとしよう。

十訓抄話は，Ⅰを「さきなる女房」（詳解本文。岩波文庫本「さきにたちたる女房」）の発言とする。今物語話はⅠを欠く。Ⅰを欠いて，Ⅱを「さきにたちたる女房」のことばとする。両者は，先頭を歩く女房の発言内容を異にしているのである。Ⅵの発言者「さきなる女房」がこの先頭を行く女房のこととすれば，十訓抄話はⅠとⅥ，今物語話はⅡとⅥを，同一人物のことばとして設定していることになる。ⅠとⅥ，ⅡとⅥ，そのそれぞれから窺える人物形象に差違はあるのか。その両者の，一話へのかかわり方に相違点が見出せるか。

ⅠとⅥは，「ゆゝしき蛍……」「物おそろしや……」と，共に散文表現によって物事を大袈裟にとりあげていることばである点で，類同する。

ⅡとⅥ。Ⅱは，既に述べたように，「秋已近。辰星早没夜初長」の真意表明を企図した吟詠。遣水に蛍の集っている様子を見ての感慨である。この実景の捉え方－蛍に秋の夜長を思う－を起点に，女房達の連想がつむがれてゆくのである。これに比較していえば，Ⅰの「（雪を）集めたらんやうにこそ見ゆれ」は蛍の明るさに対する驚きの表明であるが，Ⅱへの連想契機をもたず，実景の直叙以外の何ものでもない。Ⅵは，男が「ねずなき」に托した意図の解読法を他の女房に何げなく認知せしめることばであること，上述のとおりである。Ⅶはこの教唆に基づいて想起される。ⅡとⅥとは詩句と散文とであり，本話の如く古詩歌の連想によって展開する話においては，表面上の異質性はきわだっている。しかし，同一人物の発言として一話中における機能という点から見ると，それは共に，以下に続く連想への契機となっていて，類同する。「さきなる女房」は，恐らく年配の女房で，そのサロンに文芸的情趣のあふれる場を常に引き出す役割りを演じた人ではなかったか。

かようにして，ⅠとⅥ，ⅡとⅥは，共に同一人物の発言として見ることのできる性格を備えている。十訓抄と今物語との先後関係はなお確定させがたいが，本話の場合，Ⅰは悦目抄話にも見え，又Ⅰを増補する意図も見極めがたい点からすると，十訓抄話の説話展開の方が古態を保つといえるかも知れない。もしこの判断に誤りがないとすれば，今物語話は，物事を大袈裟にとりあげる女性としての「さきなる女房」の人物形象を，物事の文芸的情趣を掬い上げ，サロンに話題を提供し，女房たちに情趣の向かうべき所を常にさし示しながら場の興趣をコーディネイトする女性に改変したこととなる。十訓抄話・今物語話のいずれの人物形象が一話にとって意義あるものか，にわかに断じかねる。ただ，「やさし」の世界の形成にいかに叙述が参加しているかという点から見れば，「ゆゆしき…」「物おそろしや……」と統一されて提要話における「わずなき」の扱いをもたらす契機となったかとも考えられる十訓抄話の人物形象に比して、改変を得た今物語話の人物形象の方が，登場人物が「とりどりにやさしかりける」人物として描かれるという意味で，より意義深いものと認められよう。

何度も繰り返すことになるが，「やさし」とは，王朝的・和歌的情趣につらなる心の用い方や発想のあり方について，中世人が与えた評言である。今物語所収話は，その二・三・四段を扱った本稿の考察によるかぎり，「やさし」と評しうる人々の心もちいや発想を，説話叙述においてよく描き出している。今物語と同じように王朝文化に対する志向からその類話を収載する諸作品が，「やさし」の説話評言を継承しながらも，王朝志向そのものの形骸化，王朝古典文芸世界に対する皮相的な享受の姿勢によって，説話の内容とその叙述，更には「やさし」の中味まで変質させてしまったのと，それは鋭く対立する。そして，時に，その叙述は，その先鋭にして深長なる王朝志向に出る説話理解によって彫琢化がはかられ，類同するあり方を示すことの多い十訓抄話に対しても相違を生み出すに至ることがあった点，上述の通りである。今物語話の位置は，ここに明らかであろう。

では，かような今物語話の位置は，そのまま

作品としての今物語の位置を示すものなのか。説話叙述のあり方と等価な説話理解を，今物語という作品自身がもち得ていたのか。或いはそれは，依拠説話の叙述に主体的に立ち入らぬ消極的な説話受容の結果としてもたらされたもので，単に前代の説話理解のあり方を個別的に伝えているにすぎないのか。今物語の作品評価と作品成立事情とにかかわるこの問題についての考察は，今物語に関する基礎的覚書の第三稿(21)での課題とし，本稿の筆をここに擱くこととする。

注

(1)「美福門院と頼長－今物語第一話人物考証・恋見－」説話・物語論集10，昭和57年５月。尚，この場をかりて，前稿の誤りを訂させていただく。前稿第５節において，愚管抄の記事「ソノ日ハ二男宇治左府頼長ノキミハ，中将ニテシタカサネノシリトリテナドゾ物ガタリニ人ハ申ス」を引き，これを頼長自身が自らの下襲の裾を取りはずしていたと解した。しかし，古今著聞集203によれば，ここは，頼長が中将の位にありながら父忠実の下襲の裾を執り，その世話をしたとも考えられる。論旨に変更はないが，ここに記して前解を訂すことにする。

(2)延慶本及び南都本平家物語・源平盛衰記では，上掲「忠度都落」の件りで引かれている。

(3)冨倉徳次郎氏は，本話柄を「忠度都落」に引く形を原形とし，「富士川」に引くあり方を，「ここに一応風雅な話の一群を用意しようとした，語りものとしての改作」とされる（『平家物語全注釈』中巻，角川書店，昭和42年５月刊）。

(4)　これは，巻第八（「小手巻」）の件りに見られる和歌詠出にも指摘できよう。

(5)延慶本平家物語には「ユユシウゾ聞エシ」，佐々木本平家物語には「イト珍重ソ聞エシ」とある。尚，富倉氏はこの評言について，

なおここにある「別れ路をなにか嘆かん」の歌は，忠度としては，将門追討の古例を思い，満々たる勝利の自信を示している歌である。したがってこの所の「いとやさしうぞ聞えし」は忠度の歌人としての面を強調したわけである。

と説明される（注(3)『全注釈』中巻）。

(6)中世の文学『今物語・隆房集・東斎随筆』の補注18，参看。

(7)注(6)，補注７，参看

(8)注(7)に整理されているものに従ったが，少し改めたところがある。

(9)岩波文庫本「など扇はつかひやみたまひつるぞ。」又『訓解』頭注によれば，佐久間本・狩谷本も同。

(10)Ａロａは，来客中との具体的叙述をもつＡロｂとの対比において，今，叙述あるものと認めない。

(11)注(7)

(12)注(7)の示す解釈。

(13)河内山清彦「今物語・世継物語の世界」（日本の説話４，東京美術，昭和49年６月刊）参看。

(14)「く」は「候」の誤写とみて，群書類従本の本文をとる。この方が，文意が通る。

(15)唐，元稹「夜坐」。全唐詩，所載。

(16)唐，白楽天「長恨歌」。

(17)後撰集，巻四，夏。大和物語第四〇段。

(18)後拾遺集，巻三，夏。第二句「思ひにもゆる」。

(19)稲賀敬二氏のご教示による。記して深謝申し上げる。

(20)これも，本話柄に対して一条朝の女房たちの世界を重ねて読む理解のあり方によってもたらされたと，解釈できないわけではない。

(21)別稿「今物語の位置」国文学攷101，昭和59年４月発行予定。

〔昭和58年12月20日受理〕